今年度大切にしたいキーワード

本研究計画作成試案では、小教研会員の誰もが内容を理解できるように、各部会でレイアウトや解説の方法を工夫しています。

また、学習や研究を進める上で大切にしたい事項を「キーワード」という形で提案しています。

日常の学習指導や研究推進において、十分に活用していただきますようお願いします。

◆◆◆ 国　語　科 ◆◆◆

主体的

「主体的」とは、子供が言葉に着目し、言葉を吟味し、意味や働きを捉え直しながら、進んで言語活動に取り組むことである。そのために次のことを大切にしていく。

・指導事項を分析し、子供の実態を踏まえて、育成したい資質・能力を明確にすること

対話的

「対話的」とは、教材や友達と関わりながら、意味の異同を自覚したり、互いの考えを共有したり、自己の内面に目を向けたりすることである。そのために次のことを大切にしていく。

・自分の考えをもつ場、友達と話し合う場、自分の学びを振り返る場を設けること

評価規準の設定

言語活動の中で「考えが深まる」子供の姿を具体的に想定し、指導事項に基づいて評価規準を設定する。その上で、単元のどの段階で、どの評価規準に基づいて、どのように評価するかを決定する。そのために次のことを大切にしていく。

・設定する言語活動を教師が事前に体験しておき、努力を要する状況等への手立てを想定すること

◆◆◆ 社　会　科 ◆◆◆

主体的に社会的事象について問い続ける

「主体的に社会的事象について問い続ける子供」とは、自ら解決の方向性をもって社会的事象に関わりを求め続け、社会生活への理解を深める子供である。

学んだことを社会生活に生かしていく

「学んだことを社会生活に生かしていく子供」とは、子供が社会への関わり方を選択・判断したり、よりよい社会の在り方を考えたり、概念等に関わる知識を汎用的に使ったりする子供である。

このように、上記に見られる経験を繰り返すことで、子供は、公民としての資質・能力を育んでいく。

このような子供を育成していくためにも、社会科における学習過程や話合い活動の在り方、指導と評価についてどうあるべきか明らかにしていく必要がある。

そこで、今年度は、次のことを研究の重点としていく。

(1) 子供が社会的な見方・考え方を働かせながら、主体的に社会的事象に問い続けていくための学習過程の工夫

(2) 子供が社会的な見方・考え方を働かせながら、社会生活についての理解を深めていくための話合いの活動の工夫

(3) 3観点を基にした、指導と評価の一体化の在り方

◆◆◆ 算　数　科 ◆◆◆

主体的

「主体的」を、目的意識をもって数理的な事象に繰り返し働きかけ、自分の考えをつくり上げることとする。

対話的

「対話的」を、自分の考えを具体物、図、数、式、表、グラフ、言葉等を用いて表現し、自ら友達へ関わりを求めて伝え合う活動を通して、自分の考えを再構築していくこととする。

そのために、今年度は次の3点を大切にしていく。

・数学的に考える資質・能力を育成するための単元計画

・問いをもち、数学的活動を通して考えを深めるための場の設定

・学びを実感し、次時への見通しをもつ振り返り

このように、数理的な事象に主体的・対話的に関わり、数学的な見方・考え方を働かせる中で、新たな視点から自分の考えを再構築していく子供の育成を目指す。

◆◆◆ 理　　科 ◆◆◆

主体的・対話的な探究

「主体的に探究」している子供は、自然の事物・現象に興味・関心をもち続けながら、自らの問題を見いだし、見通しをもって問題解決していく。また、「対話的に探究」している子供は、人との対話、自然の事物・現象との対話、自分との対話を通して、自己の考えを広げ深めながら、問題を科学的に解決する。

粘り強さと自己調整の力

評価の観点「主体的に学習に取り組む態度」では、知識及び技能を獲得したり、思考力、判断力、表現力等を身に付けたりすることに向けた粘り強い取組を行う側面と、粘り強く取組を行う中で、自らの学習を調整しようとする側面が求められている。粘り強さの側面からは解決方法を振り返り、それらを見直し、再検討を加えることも大切である。また、自己調整については、より妥当な考えをつくり出すために、他者と関わり、自分の考えや学習の進め方を振り返り、見直そうとする機会をつくることが大切である。

◆◆ 生活科・総合的な学習の時間 ◆◆

単元の見通しを子供と共有する

単元との出会いの場では、子供自身が「やってみたい」「できそうだ」「解決したい」という意欲をもち、これからの学習を見通し、いつも単元名に立ち返って取り組むことができるよう、単元との出会い方や単元名を工夫する。また、単元が進んでも、小単元や単元全体の見通しを共有し、子供たち自身が「今、何のために、この活動をしているのか」を意識できるようにし、子供の主体的な活動へとつなげる。

子供たちが自分との「違い」に気付くための共有の場面を大切にする

他の子供が相手の気持ちをより想像しながら聞けるように、聞い返すだけでなく、場の再現や動画で確認するなど、発言している子供の意図が伝わるように工夫したい。このように、話合いを進めていくと、子供は自分と比べて聞き、「違い」に気付く瞬間がある。その過程の異なる部分、思いや願い、学習の進め方、学んだこと等の違いに注目して聞くことができるようにしたい。これらの「違い」から、自らの取組を見直し、探究を充実させていく。

◆◆◆ 音　楽　科 ◆◆◆

音楽と豊かに関わるための題材構成や教材選択の工夫

音楽の構造等を分析し、適宜、〔共通事項〕を要として各領域や分野の関連を図るなど、効果的な学習展開となるよう題材構成や教材選択を工夫する。また、学校や地域の実態に応じて題材構成を工夫し、学んだことや音楽活動と学校内外における様々な音楽活動とのつながりを意識できるようにする。

『音楽のよさ』を感じ取るための学習過程の工夫

音楽的な見方・考え方を働かせ、友達と協働しながら、聴き取ったことと感じ取ったこととの関わりについて考える場を設けたり、音楽の構造を可視化したりする。また、音や音楽及び言葉によるコミュニケーションを図り、音楽科の特質に応じた言語活動を適切に位置付けられるように工夫する。

一人一人のよさや可能性が生きる評価の工夫

指導と評価の一体化を図り、「子供にどういった力が身に付いたか」という学習の成果を的確に捉え、指導の改善に生かしていくとともに、子供自身が自らの学習を振り返って次の学習に向かうことができるようにする。

◆◆◆ 図画工作科 ◆◆◆

ものや人と関わり、豊かに発想や構想をする力を伸ばすために

題材名や題材との出会わせ方等の題材提示の仕方の工夫や、活動で出会わせる材料や用具、場所等を吟味し、工夫することに取り組む。また、友達との関わりが、自然と生み出されるような場を工夫することに取り組む。

創造的につくったり表したりする力を伸ばすために

鑑賞活動の工夫や言語活動の充実を意識した、創造的な技能を発揮できる鑑賞や話し合い活動に取り組む。また、技法等の紹介や共有、試行錯誤できるような時間や場所の確保、子供の動線を考えた各コーナーの設置、といった学習環境の工夫に取り組む。

造形的な見方や考え方を広げ、深めるために

活動中の姿をとらえる工夫や、自己評価・他者評価の工夫を図る。また、ICT機器等を活用した記録の累積に取り組む。

◆◆◆ 家　庭　科 ◆◆◆

指導の効果を高める題材構成

子供がよりよい生活を目指すには、家庭科の学習を通して「できるようになった」「力が身に付いた」という達成感を感じられるようにすることが大切である。そのためには、児童の実態等を踏まえ、学校や地域の特色を生かし、指導の効果を高める題材構成を行い、関連する内容の組合せを工夫したり、学習過程との関連を図ったりする必要がある。

学びを深める手立て

子供が主体的に課題の解決に取り組むことができるよう、日常生活を見直して課題を設定し、計画、実践、評価・改善という一連の学習活動を重視した問題解決的な学習を充実させ、学習した内容を実際の生活に活かす場を設定する。また、考えや取組の異同を明確にするためにICTや写真、図等を活用する場を設定する。さらに、目的や視点を明確にした上で、考えの背景を話し合う場をつくることで対話的な学びを促し、自分の考えや取組を見直すことができるようにする。

指導と評価の計画の作成

題材の目標を明確にし、指導の計画を立て、題材の評価規準を作成する。その上で学習活動に即して題材の評価規準を具体化する。さらに、家庭科の学習の特質や評価する時期や場面を精選し、適切な評価方法を設定する。一人一人の観点別の学習状況を的確に捉え、指導に生かすことのできる評価を進めていくことで、個に応じた適切な指導や支援につなぐことができるようにする。

◆◆◆ 体　育　科 ◆◆◆

子供の思いや願いを想定し、習得・活用・探究の見通しがある授業づくり

子供の運動への思いや願いを捉えた上で、運動の特性や系統性を踏まえ見通しをもった授業づくりを目指す。子供たちが、身に付けるべき知識、及び、技能をしっかりと習得できる指導方法を考えることは勿論、習得したものをどう活用していくか、また、取り組んでいる運動の何に向かって探究を深めていくか、ということについても具体的な子供の様相を思い描きながら単元を構成することが重要となる。

子供自らが体育の見方・考え方を働かせ、課題解決を図ることのできる学習過程

体育の見方・考え方を働かせるとは、子供が自己の適性に応じて、「する・みる・支える・知る」の多様な関わり方と運動を関連付けることである。運動や共に運動する仲間との関わり、また、自分自身との関わりを通して、体育の見方・考え方を育み、それらを働かせながら課題解決を図っていく学習過程を大切にする。

子供が自分の高まりや変容を実感し、自ら次の活動に進んでいくことができる振り返り活動

子供が、自分の変容や高まりを実感したり、自分の学び方を振り返り次の学びへと見通しをもったりすることができる振り返り活動（「C：振り返り」→「A：改善」→「P：計画」）に重点を置きながら、PDCAサイクルの充実を図る。

◆◆◆ 道　徳　科 ◆◆◆

主題の分析

道徳科の授業をつくるには、「子供の実態把握」や「内容項目の解釈」「学習指導の構想」から成り立つ「主題の分析」を行うことが大切である。主題の分析を行うことによって、教師は、授業のねらいを明確にもつことができる。その際、各作業を往復し、内容を充実させていくことによって、ねらいに迫るための効果的な発問を考えたり、板書を構想したりすることにもつながっていくものとなる。

自己の生き方についての考えを深めるための教師の働きかけ

子供一人一人が道徳的諸価値についての理解を基に、自己を見つめ、物事を多面的・多角的に考え、自己の生き方についての考えを深める授業を目指すには、教師の明確な意図をもった働きかけ（ねらいに迫る発問や問い返し等）を工夫することが大切である。

指導と評価の一体化

道徳科では、学習状況を適切に評価することが求められている。評価の対象となる子供一人一人の学習状況は、教師の指導によって変わるものであり、教師の指導を充実させていくことが評価の充実につながり、評価を充実させていくことが指導の充実につながる。

◆◆ 外国語活動・外国語科 ◆◆

単元構成の工夫

バックワードデザインに基づき、ゴールの姿を明確にした単元構成をすることにより、子供たちは見通しと目的意識をもって活動に取り組む。また、新しく出合う語彙や表現に慣れ親しむ活動と、既習の語彙や表現を活用する活動を繰り返していく単元を仕組むことで自分の考えや気持ちをより豊かに伝え合うことができる。

言語活動の充実

単元の目標を踏まえて、実際に英語を使用し互いの考えや気持ちを伝え合う必然性のある場面を設定する。中学年では、子供が興味・関心をもつような題材を扱い、自分のことを話す場面を設定することで既習表現に慣れ親しんだり、表現がより適切になったりする。高学年では、自分のことに加え、相手や身の回りの物に関する事柄について伝え合う場面を設定することで、使う表現を選択・自己決定するために思考し、相手意識を育むことができる。また「読むこと」「書くこと」については、音声で十分慣れ親しんだ簡単な語句や基本的な表現を取り上げ、子供が過度の負担を感じることがないように留意する。

◆◆◆ 特 別 活 動 ◆◆◆

人間関係形成　＜築きたい人間関係＞

「個と個」や「個と集団」の関わりの中で、互いのよさを生かし、協働して取り組み、よりよい人間関係を築こうとする視点。必要な資質・能力は、集団の中において、特別活動の学習過程全体を通して、個人と個人あるいは個人と集団という関係性の中で育まれると考えられる。違いを認め合い、みんなと共に生きていく力を育てる。

社会参画　＜つくりたい社会＞

児童が現在、そして将来に所属する様々な集団や社会に対して積極的に関わり、よりよいものにしていこうとする視点。必要な資質・能力は、自発的、自治的な活動を通して、個人が集団へ関与する中で育まれると考えられる。よりよい集団や社会をつくろうとする力を育てる。

自己実現　＜なりたい自分＞

将来を見通して、今の自分にできることを考え、よさや可能性を生かして実践しながら、よりよい自分づくりを目指す視点。必要な資質・能力は、自己の理解を深め、自己のよさや可能性を生かす力、自己の在り方や生き方を考え設計する力など、集団の中において、個々人が共通して当面する現在及び将来に関わる課題を考察する中で育まれると考えられる。なりたい自分に向けてがんばる力を育てる。

◆◆◆ 特別支援教育 ◆◆◆

主体的・対話的に取り組む

教師がそれぞれの子供の実態を的確に把握し、子供の「強み」を生かした単元を構想したり、子供の願いや教育的ニーズに基づく指導や支援を行ったりすることで、子供は見通しをもって主体的に取り組み、学ぶ楽しさを味わうようになる。また、子供が安心できる環境を整え、教材や題材、教師や友達との関わり方を工夫したり、自らが学習を進められるような場を設定したりすることで、子供は感動や分かる喜びを味わうことができ、様々な対象や事象（人、もの、こと）、自分と対話しながら粘り強く学習に取り組むことができると考える。

学びを自らのくらしに生かす

学校生活の学びで得られた成功体験を自らのくらしに意識的に反映させることで、子供は「自分にもできそうだ」「やってみたい」と自信をもって生活することができると考える。そのためには、子供の個性や能力を的確に把握して、それを基に個別の教育支援計画や個別の指導計画を作成し、それぞれの子供に合った支援を行う。さらに、学校生活での学びを自らのくらしに生かすことができるように、家庭や地域と連携していく。子供の教育的ニーズに基づいた計画的・継続的な支援の下、子供が身に付けた見方・考え方を働かせて日々「分かった」「できた」を積み重ねることが生きる力となり、将来の自立的な社会参加を支えることにつながると考える。

◆◆◆ 保　　健 ◆◆◆

組織的かつ計画的・継続的な取組

学校の教育目標が達成されるよう、子供の心身の発達の段階に応じて、体系的な教育が組織的に行われることが大切である。そのためには、教職員がそれぞれの役割に基づいて、組織的かつ計画的・継続的に取組む必要がある。

指導と評価の工夫

「生きる力」を育む資質・能力の一つとして、健康に関する力が位置付けられた。この力を育むための保健教育は、教科等横断的な視点に立ち、各教科等の特質を生かし、関連を図りながら行う。また、ノートや学習カードの記述、授業中の発言等を参考にし、学習過程での子供の変容を指導に生かしながら、単元を通して子供の学習の意欲が高まるような指導の充実を図っていく。そして、学習過程や成果を評価し、学習改善や指導の改善につなげていく。

養護教諭の専門性を生かした効果的な取組

養護教諭が学級担任と連携し、集団指導において専門性を生かす役割を効果的に果たすことにより、その後の保健室での個に応じた指導に生かす。